HOKUSEI@COM

2013・MARCH
vol.15

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE SPRING EDITION

北星学園大学
北星学園大学短期大学部

02-03
［特集］
宇宙飛行士
毛利 衛さん
インタビュー

02-03
北海道から
世界へ、宇宙へ。
そして、地球の未来へ。
宇宙飛行士
毛利 衛さん

04-05
［学生たちの素顔］
障がいを
学びの壁にしない。
強い使命感を持って
前に進む。

06
［OB&OG インタビュー
卒業生は、いま。］
北海道真駒内養護学校中学部教諭
柳 久美さん
どの子も可愛くて
しかたない。
小さな成長も
大きな喜びです。

07
［先生たちのその素顔］
短期大学部　藤原 里佐先生
障がい児とその家族が
“あたりまえの生活”を
おくるために…。

08
［まち★交流録］
地域交流イベントを
本学学生・教職員もお手伝い
もみじ台の
地域の大広間
写真を学ぶ本学学生が入選
みんなの！新さっぽろ
フォトコンテスト

北星学園大学チャペルにて

[特集] INTERVIEW

宇宙飛行士　毛利衛さんインタビュー

北海道から世界へ、宇宙へ。そして、地球の未来へ。

1992年に日本人で初めてスペースシャトル「エンデバー」号に搭乗し、宇宙へ羽ばたいた毛利衛さん。あれから20年、環境問題や自然災害に直面する地球の現在、そして未来は、毛利さんの目にどう映っているのでしょうか。北海道余市町で生まれ、本学ともゆかりの深い毛利さんにご来学いただき、ふたりの学生がインタビューしました。

北海道から世界へ。新しい価値観に出会った青年時代。

新保：北海道大学で学生時代を過ごされた毛利さんには、同じ北海道の学生として親しみと誇りを覚えます。毛利さんは大学時代、どのようなキャンパスライフを送られていたのでしょうか?

毛利：私は1965年に北海道大学に入学しました。化学が好きで、実験に没頭したり教授の研究を学んだりしていましたが、大学1年の春休みに初めて北海道を飛び出して九州へ。北海道とはまるで違う方言や習慣にふれ、地元の人々と交流した経験は、私の価値観を大きく変えるものでした。世界には私が知らない文化や生き方がある。もっと広い世界を知りたい ――― それは大学の実験室では得られない気づきでした。

山口：私も高校時代にアメリカに1年間留学した際、それまでの価値観とは異なる文化や考え方にふれて驚くとともに、日本の文化や価値観をうまく伝えられずもどかしい思いをすることがたびたびありました。毛利さんも北海道大学大学院を修了後、オーストラリアのフリンダース大学大学院に留学されたそうですが、異なる価値観や文化の中でご苦労されたことはありましたか?

毛利：留学先では日本人は私ひとりだけでした。当時の日本は高度経済成長期で、資源輸出国のオーストラリアは日本に高い関心を抱いていました。そのため私にも日本に関する質問が寄せられるものの、当時の私は、科学の知識はあっても日本の歴史や文化、価値観はまるでわかっていなかったのです。そこで私は、夏目漱石や宮沢賢治などの日

PROFILE

毛利 衛（もうり まもる）

1948年、北海道余市町生まれ。理学博士。北海道大学助教授を経て、85年に宇宙開発事業団（NASDA、現JAXA）の宇宙飛行士に選抜される。92年と2000年、スペースシャトル・エンデバー号で、宇宙実験や地球陸地立体地図作成データ取得を行った。03年、しんかい6500に搭乗し深海での科学実験を遂行。同年、南極で皆既日食の生中継を行う。07年、南極昭和基地にて開設50周年事業に参加。現在、日本科学未来館館長、東京工業大学大学院連携教授、東京理科大学客員教授、アジア太平洋地域科学館協会会長としても活躍。

本文学を数多く読みました。数々の作品を通じて、謙虚を尊び思いやりを大切にする日本人の美しい生き方を実感し、初めて自分の言葉で伝えることができるようになったのです。山口さんが「伝えられない」と思っているのは、じつはまだ「伝えるべきもの」を自分の中に確立していないためかもしれませんね。

山口：確かに今まで「伝えるためにどうするか」を考えてきましたが、「何を伝えるか」についてはあまり深く考えたことはありませんでした。日本の文化や歴史、ものの考え方について、まだ認識不足だったかもしれません。世界を視野に入れたコミュニケーションのためには、まず日本人としての自分をしっかり認識することが必要ですね。

毛利：ノーベル賞を受賞する人々は、自らの研究について揺るぎない考えを確立しています。だからたとえ英語が堪能でなくても、単語を並べるだけで研究の素晴らしさは伝わるのです。どんな場面でも、伝えるべきものを自覚することは大切だと思いますね。私が現在館長を務めている日本科学未来館では、科学者・技術者と市民を相互に結びつける「科学コミュニケーター」の養成に取り組んでいます。市民のみなさんに科学への理解を深めていただき、ともに科学の未来を考える場を創造する上でも「何を伝えるか」を明確にしたコミュニケーションが大切なのです。英語や心理学、社会福祉など、コミュニケーションを主眼とした教育にいち早く取り組んできた北星学園での学びを、これからのコミュニケーションに活かしてほしいと思います。

北星学園とのつながり、地球生命のつながり。

新保：毛利さんは余市町のご出身ですが、そこには北星学園余市高校もあり、また奥様の彰子さんが本学文学部英文学科卒業生と、「北星学園」とは少なからずご縁があると伺っています。

毛利：妻とは札幌市内の英会話教室で知り合って結婚しましたが、じつは妻の母も北星高等女学校（北星学園女子中学高等学校の前身）出身です。また、北星学園大学学長および北星学園理事長を務められ、2012年に召天された土橋信男先生とも北大時代に知り合い、懇意にさせていただいていました。土橋先生の論理的思考と豊かな国際感覚、学生に対する寛容な心は、キリスト教の精神のもとに築かれたものと感じていましたし、土橋先生の指導を受けた妻にもやはりキリスト教に基づく深い人間性が息づいていると感じています。私が数々の苦難を乗り越えて宇宙飛行士の夢を実現し、今ここにいられるのは妻のおかげです。北星学園のそうした教育のもとで育った伴侶を得たことに、とても感謝しています。

新保：「宇宙飛行士」という存在は私たち学生にとって遠い存在だと思っていましたが、奥様をはじめとする本学との深い結びつきをとてもうれしく思います。

毛利：宇宙飛行士もみなさんと同じひとりの人間です。重大な公的ミッションを担う者として苦労を重ねてきたのは事実ですが、その一方で「宇宙から地球を見る」という視点を得ることができました。私が宇宙から地球を見たとき思ったのは、「宇宙では誰も守ってくれるものはいない」ということ。宇宙から見れば70億人が暮らす地球もきわめて小さな星であり、生命誕生から40億年という時間もあっという間です。2年前の東日本大震災や今年

スペースシャトルから撮影した千島列島と北海道（オホーツク海上空より）。

2月のロシアへの隕石落下などは私たち人間に大きな打撃を与えましたが、こうした自然災害は40億年という時間の中で幾度となく繰り返されてきました。明日巨大な隕石が落下して地球が火星のような死の星になってしまっても不思議ではありません。だからこそ、生命は個として生き延びるために環境に適応し、より多くの個が生き延びるために社会という集団でつながり、学問や芸術、政治、経済、宗教、科学技術などの智恵を生み出してここまで生き延びてきました。北星学園大学で学ぶみなさんや、地域で暮らすみなさんの日常の営みも、一つひとつがこうした地球40億年の生命のつながりを形成しています。地球環境の限界が明らかになった今こそ、私たち一人ひとりがそういう視点を持って生きることが、地球の未来に生命をつないでいくために必要なことだと思っています。

新保・山口：学生として、人間として、これからの生き方を新たな視点で考えるきっかけをいただくことができました。本日はありがとうございました。

二度の宇宙飛行経験に基づく思想「ユニバソロジ」を通して地球生命として生きる道を語った著書『宇宙から学ぶ――ユニバソロジのすすめ』（岩波新書）。

やまぐち　かおり
山口 佳織
文学部英文学科3年

留学中に体験した伝達の難しさを、伝える努力の不足ではなく「伝えたいことが確立していないのでは」と助言され、感銘を受けました。毛利さんの発想の転換に学ぶことが多く、貴重な体験をさせていただきました。

しんぼ　ともみ
新保 知美
経済学部経済学科3年

宇宙飛行士の使命を果たす上で、良き伴侶の存在が支えとなったというお話が印象的でした。海外での自己表現にまつわるお話も、就職活動でのコミュニケーションに役立ちそうです。

学生たちの素顔
Our students: A closer look

特別企画　田村学長が安達朗子さんに聞く

障がいを学びの壁にしない。強い使命感を持って前に進む。

北星学園大学では、障がいを持つ学生を積極的に受け入れています。安達朗子さんもそのひとり。「諦めなければ必ず道は開ける」と信じ、視覚障がいというハンディを乗り越えて短期大学部に入学。大学編入学後に英語弁論大会で準優勝、大学院入学後は韓国語の弁論大会でも大賞を受賞するなど、活躍の場を広げています。「障がいを持つ学生が生きる力を育む大学でありたい」と語る田村信一学長も、安達さんの成長を頼もしく見守っています。

北星なら目が見えなくても学べる。多くの人に支えられ、首席で大学院へ。

田村：安達さんはひき逃げ事故に遭って15歳で失明され、20歳で盲学校に入学されたそうですね。

安達：はい。重傷を負い視力まで失った絶望的な状態でしたが、両親が「苦しみは乗り越えるためにある」「朗子にしかできない使命があるんだよ」と励ましてくれ、厳しいリハビリを重ねて北海道高等盲学校に入学しました。その時担任だった英語の先生が「北星なら視覚障がい者でも高い英語教育が受けられるし、海外留学の夢も実現できる」と勧めてくださり、猛勉強の末、北星学園大学短期大学部に入学しました。

田村：本学は開学当初から社会福祉学科を設置しており、障がいのある学生の受け入れも早くから行ってきました。近年は文部科学省からの支援もあり、補助機器の導入や人的介助などもいっそう充実させ、安達さんに先がけて全盲の学生を社会へ送り出しています。こうした実績もあり、安達さんの入学にはとても期待していました。

安達：短大時代から学生支援課の職員の方が授業のノートテイクや教材の準備、介助をしてくださるなど、十分過ぎるほどサポートしていただきました。周りの友人も授業の状況を教えてくれたり、先生方もいつも気にかけてくださり、何の心配もなく勉強を続けてこられました。いま右目は光を感じる程度、左目は針穴程度の視野が戻っていますが、拡大鏡を使っても一文字ずつしか読むことができないため、毎日2～3時間の睡眠時間で勉強に打ち込みました。その結果、良い成績を収めることができ、もっと勉強したいという意欲が湧いてきて、大学編入学を決意したんです。大学でも多くの友人や先生、家族に支えられて勉強を続け、首席で卒業することができました。くじけそうになる時もありましたが、学びの成果を出すことが支えてくれる人々への恩返しだと信じて、ここまでやってこれました。

安達（あだち） 朗子（あきこ）さん

北星学園大学大学院
文学研究科 言語文化コミュニケーション専攻
修士課程 1年（英語教育・コミュニケーション研究）

高校1年の夏に信号無視の車にひき逃げされ、重傷を負って失明。その後懸命のリハビリに励み、20歳で北海道高等盲学校に入学。2008年北星学園大学短期大学部英文学科入学。2010年北星学園大学文学部英文学科に編入学。2012年に首席で卒業後、同大大学院文学研究科に進学。

田村（たむら） 信一（しんいち） 学長

北星学園大学・北星学園大学短期大学部

法政大学大学院社会科学研究科修士課程修了。立教大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。1981年に北星学園大学着任、経済学部長、副学長、学長事務取扱などを経て、2012年8月より学長就任。経済学博士。

学長室にて

弁論大会で成果を収めてアメリカへ。もっと多くの人へ思いを伝えたい。

田村：4年次には、「札幌ーポートランド姉妹都市提携記念『第43回英語弁論大会』」でも素晴らしい成績を残されたそうですね。

安達：優勝すると親善使節としてポートランドへ派遣されるコンテストで、私は準優勝だったんです。でも、審査終了後にアメリカ領事が私のもとへいらして「あなたのスピーチにとても感動した」と声をかけてくださいました。その後しばらくして「アメリカ領事がポートランド市民にあなたのスピーチを聞かせたいと願い、スポンサーを募って特別にポートランドへ招待派遣されることになった」と電話で知らされました。アメリカ留学と海外でスピーチすることは以前からの夢だったので、とてもうれしかったです。ポートランド市役所で行ったスピーチのテーマは「私の使命」。スピーチのあと市民のみなさんから「感動しました」と握手を求められ、少しでも希望や勇気を感じていただけたなら、これが「私の使命」ではないかと実感しました。

田村：苦難を乗り越えて夢を実現してきた安達さんの言葉は、国境を越えて心に響くのでしょう。大学院ではどんな研究をしているのですか?

安達：異文化コミュニケーションをテーマに、健常者と障がい者の関わり方などを研究しています。大学時代に韓国語も学び始め、韓国政府主催の韓国語能力試験2級にも合格しました。当初「視覚障がい者の出場は前例がない」と言われたものの、大学で韓国語を教えてくださった先生が韓国教育院を介して韓国国際教育院に話を通してくださり、受験できたのです。昨年10月には韓国語弁論大会に出場し、優勝を果たすこともできました。さらに依頼を受けて札幌医科大学で将来医師になる学生のみなさんに講演を行うなど、言語や国籍、職業の枠を越えたコミュニケーションが広がっています。

田村：人間の可能性は無限ですね。安達さんをサポートしてきた私たちの方が逆に、教えられることがたくさんあります。

安達：事故当時に両親が言った「朗子には朗子の使命がある」という言葉の意味をいま実感しています。健常者と障がい者双方の立場を知っている私だからこそ、社会に伝えられるものがあるのではないかと思っています。社会では点字ブロックや地下鉄の転落防止柵などバリアフリー化が進んでいますが、障がい者が望むのはモノではなく心です。障がい者が心置きなく日常生活を楽しめる、あたたかい理解が満ちた社会をつくっていけるよう、私の使命を果たしていければと願っています。

田村：安達さんのような学生が本学で学んでいることを誇りに思います。本学の教育が障がいを持つ学生の生きる力になっていることは、教育者としての喜びです。安達さんの未来を応援しています。

本学文学部英文学科・江口ゼミではゼミ活動の一環として、大谷地東小学校の5・6年生を対象に英語教育活動の支援授業を行っています。安達さんも大学3年生の時にゼミ生のひとりとして活動に参加。「目が見えないからこそ言葉で心が通じ合う喜びを感じます」と語り、子どもたちとのふれあいを楽しんでいました。

OB & OG Interview

卒業生は、いま。

どの子も可愛くてしかたない。小さな成長も大きな喜びです。

札幌市南区にある北海道真駒内養護学校には、
福祉教育に力を入れている北星学園大学からも数多くの卒業生が教員として従事しています。
そのひとりである柳さんに、特別支援教育への思いを語っていただきました。

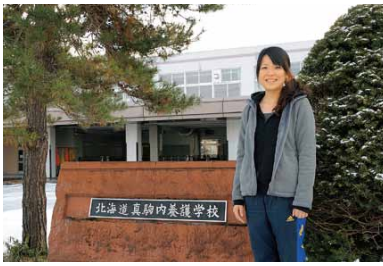
北海道真駒内養護学校中学部 教諭
柳　久美（やなぎ　くみ）さん
2010年北星学園大学社会福祉学部福祉臨床学科卒業

大好きな子どもたちに毎日会える幸せ。

大学卒業後に1年間の期限付教員を経て本採用となり、2年前に真駒内養護学校に着任しました。本校は肢体不自由児のための特別支援学校で、小学部・中学部・高等部が設置されています。私が担任を務めているのは中学部の1年生です。6クラス14名の生徒に対して各クラス担任6名、学年付教員3名、学年主任・介護員各1名が付きます。私のクラスの生徒は2名と少ないですが、コミュニケーションや気持ちの表現など、それぞれの方法で思いを伝えようとしてくれます。ふたりが笑顔を見せてくれたり、目を見て声を出してくれるととてもうれしいですね。あるとき入院中の生徒を見舞ったところ、私の声を聞いて笑顔になってくれたんです。ああ、私に会えたことを喜んでくれているんだな、と胸がいっぱいになりました。「大変な仕事だね」とよく言われますが、自分自身は大変だと思ったことはないですね。とにかく子どもが可愛くて、毎日教室で会えることがうれしくてしかたない。大好きな子どもたちの成長をそばで見守れるのは幸せです。

特別支援教育を志した学生時代。

じつは大学1年の時、アルバイトを優先して教職課程の履修を諦めたことがありました。でも教員の夢を追い続けている友人がうらやましくて、2年次から再び履修。専門分野の臨床福祉を深く学んでいくうちに、特別支援教育に携わりたいと思うようになりました。臨床福祉を通して得た知識は、教育の現場でもさまざまな形で役立っています。さらにボランティア系サークル「障がい児者福祉研究会」「おとしより研究会」「ボランティア・コパン部」に所属し、さまざまなボランティア活動にも参加。障がい児とその家族のキャンプをお手伝いするボランティアは、今でも夏休みになると参加しています。教員採用試験対策でお世話になった教職実習準備室にも、仕事の報告などでよくお邪魔しているんですよ。スタッフの方々が保護者の目線からアドバイスしてくれることもあり、とても参考になります。当面の目標は、通信課程を利用して小学校教員免許を取得すること。いつの日か、障がい児が人生で初めて出会う教育の現場を支えたいと思っています。



新ひだか町での1年間の臨時教員を経て真駒内養護学校へ。「子どもたちが卒業後の人生を豊かに生きてくれることが願いです」と柳さん。

車いすの児童生徒が多いのでスロープはとても大切。普段の教室移動はもちろん、歩行の練習にも使用しているそうです。

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●短期大学部 生活創造学科　藤原 里佐先生●

障がい児とその家族が“あたりまえの生活”をおくるために…。

PROFILE

藤原（ふじわら） 里佐（りさ）

1986年3月同志社大学文学部社会学科卒業後、保育士や養護学校教諭として勤務。1996年3月北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了。2005年同博士課程修了。2001年4月帯広大谷短期大学社会福祉科専任講師に着任。2004年4月北星学園大学短期大学部生活創造学科助教授に着任。准教授を経て2010年4月教授に就任、現在に至る。

〈所属学会〉
日本社会福祉学会、同志社社会福祉学会、日本キリスト教社会福祉学会、北海道子ども学会、北海道教育学会、貧困研究会

障がい児とその家族の生活実態

障がいを持つ子どもに対する療育・福祉・教育の制度、サービスは拡充してきましたが、それは、家族を経由しなければ本人に届かないという一面を持っています。たとえば、障がい児が特別支援学校に通うためには、小学部から高等部までの12年間、家族の送迎が不可欠となります。その間には家族自身が病気になることや、きょうだいの育児、親の介護なども起こり得ます。障がい児のＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）を高めることと、家族の生活の質を保障することは、時として矛盾することでもあるのです。私は現在、特別支援学校のスクールカウンセラーを兼務しています。育児と介護の連続性という状況にある、重度障がい児家族の生活実態を知り、「ケアの社会化」という問題を少しでも社会に発信していきたいと考えています。

子どもとかかわる仕事へ

重度の障がいを持つ子どもに初めて出会ったのは、高校時代、友人に誘われて訪問した障がい児施設でした。公平に与えられたはずの一つの命でありながら、歩くことも、話すことも、母親を認識することも困難な子どもの姿を見て、「不当な試練」であり、「神様は不平等」では…と感じました。大学進学後、保育所のアルバイトを経験し、子どもと関わる仕事にすっかり魅了されました。同じ境地に達した仲間と保育士国家試験を目指し、在学中に資格を取得。卒業後は迷わず、保育所保育士になりました。その後、養護学校教員に転職し、障がいをもつ子どもとその家族にかかわる機会を与えられました。新任の頃は、生徒との関係もうまく取れず、失敗ばかり。「先生大きらい！」と背中を向ける子に、「私は○○さん大好き」と投げかけるのが精一杯でした。真剣に熱心にこちらの気持ちを伝えると、時間はかかるけれど、やがてそれを受け止めとめてくれるという経験を生徒から学ぶことができました。当時の生徒、そのご家族とは、今も交流が続いています。

「我らの国籍は天にあり」

本学に着任して８年。子どもと関わることが好きだったので前職に未練もありましたが、今は研究者の立場から障がい者とその家族を支援したいと考えています。学生が障がいに対する理解を高め、社会の構成メンバーの一人として、障がいをもつ方と共生する力をつけることができればと考えています。高校生の時に感じた、なぜ「障がい」をもって生まれる人と、そうでない人がいるのかという疑問は、今も頭をよぎることがあります。私は大学時代に洗礼を受け、クリスチャンとなりましたが、「我らの国籍は天にあり」という聖句に頼りながら、私の「なぜ」と向き合っていきたいと思っています。

〈藤原先生の主な著書〉

- ●重度障害児家族の生活―ケアする母親とジェンダー（明石書店・2003年／単著）
- ●障害児とその家族の貧困―重なり合う問題としての不利（明石書店・2009年／共著・子どもの貧困白書編集委員会編）
- ●子ども虐待と家族ー「重なり合う不利」と社会的支援（明石書店・2013年／共著・松本伊智朗編）

養護学校時代～高等部「街へのチャレンジ」の授業

まち★交流録
Community Support

北星学園大学は厚別区唯一の大学・短期大学として、行政機関や地域団体などとの連携事業にも積極的に参加しています。大学の学びを社会に還元し、地域活性化の一端を担う経験は、学生にとっても貴重な財産となっています。

地域交流イベントを本学学生・教職員もお手伝い

「もみじ台の地域の大広間」

「もみじ台の地域の大広間」は、少子高齢化が進む厚別区もみじ台地区において、子どもからお年寄りまで幅広い世代の市民が交流できる場の創造を通して地域の活性化を図ることを目的に、自治会など地域の住民組織や関係機関が力を合わせて、年１回開催しています。

「大広間」企画メンバーには、本学大学院修了生の林孝之さんがいます。林さんは本学卒業後、厚別区内の高齢者相談機関で働きながら、大学院で地域福祉の研究を続けてきました。林さんの研究を支援する本学社会福祉学部福祉計画学科の杉岡直人教授は、学生の実習成果を「大広間」の中で市民に発表するとともに、「大広間」に学生をボランティアとして派遣。学生たちは、「大広間」に来場した子どもたちに風船を配るなどして、イベントを盛り上げています。

また、「もみじ台まちづくり会議」にアドバイザーとして参加している本学経済学部経営情報学科の鈴木克典教授は、学生、地域住民とともにもみじ台のマスコットキャラクターやご当地メニューを開発し、「大広間」のなかで紹介。今年度の「大広間」では、鈴木教授が顧問を務めるチアダンス部の学生たちがダンス講座を開講し、学生、子ども、高齢者が一緒に体を動かしながら気持ちよい汗をかきました。

本学ではこれからも、厚別区唯一の大学・短期大学として地域の皆様との交流を深め、地域の皆様とともに、地域の活性化につとめていきます。

チアダンス部は「スポーツ・ミニ体験教室」に講師として参加。
地域のみなさんにチアダンスの基本を体験していただきました。

写真を学ぶ本学学生が入選

「みんなの！新さっぽろフォトコンテスト」

厚別区役所と株式会社札幌副都心開発公社、北星学園大学は、産学官連携事業として「みんなの!新さっぽろフォトコンテスト」を2010年度から開催しています。このコンテストは、厚別区の自然や景色、街の色、人々の暮らしなどを撮影した写真を通して、新さっぽろの魅力再発見とよりよい街づくりに結びつけることを目的としています。

本学短期大学部生活創造学科では、カリキュラムに専門科目「写真表現」を設置しています。授業で学んだ写真の実力を試す機会として、2012年度のコンテストに本学科学生が初参加。審査の結果、３名が入選、うち１名が「メガネのプリンス特別賞」を受賞しました。写真を通して新さっぽろの街に若々しいパワーを吹き込んでいきたい――授業を担当する川部大輔専任講師と学生たちの思いは、これからもたくさんの写真に収められていきそうです。

［入選作品］　撮　影：生活創造学科 2年　祓川あすかさん
作品名：「陽だまりの道」
（大谷地キャンパス北側のサイクリングロード）

Hokusei Gakuen University
北星学園大学
北星学園大学短期大学部

発行／広報委員会
〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号
TEL 011-891-2731（代表）
URL http://www.hokusei.ac.jp
E-mail koho@hokusei.ac.jp

VEGETABLE OIL INK